

氏名	PARK Sang Hee (パク サンヒ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 78 号		
学位授与日	平成 31 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	民画の現代的表現 一多様化する民画と自作について一		
審査委員	主査	教授	木下 京子
	副査	教授	本江 邦夫
	副査	京都国立博物館 学芸部美術室 主任研究員	福士 雄也
	指導教員	教授	岡村 桂三郎

## 内容の要旨

グローバリズムによりあらゆるものが画一化していく中で差別化を図るために、自国固有の伝統文化が現代的に再解釈されている。この潮流は韓国にも影響を及ぼし、韓国の伝統美術のなかで最も大衆的な民画にも注目が集まり現代的に表現されている。筆者は民画のイメージを素材の一つとして借用して作品制作を行っているが、「なぜ民画を描くのか」という質問を頻繁に受けるうちに、日本では韓国の民画についての理解が曖昧であることがわかった。筆者の作品で取り上げている《十長生図》は朝鮮民画と呼ばれてきたが、実は朝鮮時代に最も高級な画材で優れた画員により描かれた宮中装飾画の一つである。しかし、長らく民画と呼ばれ、数多くの民画の関連書籍で紹介されてきたため、誤解を受けてきたのである。

民画という分野は区分けできないほど広範である。それ故に、本論文における民画の研究範囲は、筆者が自作で借用している「宮中装飾画と民画の関係」について焦点をおく。まずは民画の概念を伝統民画と現代民画に分け、さらに風俗画からモダン民画まで細分化させて、今日の民画の多様化について分析する。そして、民画をもとに制作する民画家二名と制作に民画を借用する現代アーティスト三名を取り上げ、現代民画の特異性を明らかにする。さらに、現代アーティスト三名と筆者の作品の比較を通じて自身の作家としてのアイデンティティと今後の制作方向性について考察し、筆者独自に探し求めた伝統と現代、東洋と西洋の調和を表現することを目標に据える。これを実現させるため本論文は、はじめにと終わりにを含めて全6章で構成する。

「はじめに」では、筆者が民画をモチーフにしてきたのかその理由、および、研究目的と研究内容について述べる。

第1章では、これまでに議論されている朝鮮民画の名称に対する基本的な概念をまとめ、宮中装飾画と民画の関係について考察する。宮中装飾画の中で代表的な《日月五峰図》と《牡丹図》、《十長生図》を例に挙げて宮中装飾画が民画の影響を与えたことを明らかにし、明確に分けにくい両者の不可分な関係を整理した。

第2章では、「伝統民画」をそのまま模写する「再現民画」と伝統民画に創作の要素をそなえた「創作民画」について分析する。再現民画では、「伝統絵画ディレクター」という新しい分野を開拓して民画を高級なイメージで大衆に広めた民画作家オ・スンギョンを扱っている。創作民画では、民画に現代的な要素を取り入れ「モダン民画」と直接名前を付けたソ・ハナについて言及する。この二人の民画作家を通じて、現代の民画の人気とその多様性の一端を知ることができる。これを基に現代民画の特殊性について分析することで、筆者は、民画そのものは何よりも韓国的な絵画の一ジャンルとして認め、その文化を守っていく必要性を再確認した。しかしながら、美術史のコンテクストとは全く異なる形成過程の中で生まれた民画作家は独自の世界を展開している。

第3章では、それぞれ異なる表現技法で制作する三人の作家とその作品について分析し、民画作家との違いを考察する。民画をデジタル化したイ・イナム、伝統と現代、西洋と東洋の異なる価値をとともに絵に描いたことで自身のストーリーを表現したホン・ジョン、最後に韓国の伝統技法で擬人化した犬をテーマに民画的要素と現代的な要素を融合して表現するグック・スヨンについて論述する。第2章と3章で取り上げた五名の作家は同じ民画というモチーフで表現しているが、両者は全く異なる。オ・スンギョンとソ・ハナは伝統民画をベースに制作している。そして民画というジャンルを一般の人にもっと簡単に楽しませようとする意図がある。一方、イ・イナムとホン・ジョン、グック・スヨンは、それぞれ異なる表現方法で制作し、民画を自分の作品世界を表現するための一つの素材として使用していることを知ることができる。

第4章では、前章までの研究をもとに、自作について分析する。また、第3章で扱った民画を借用した現代アーティストとの比較することによって、筆者の作業を再検証してその方向性を考察する。日本に留学せずに韓国でそのまま制作を続けていたら、《十長生図》をモチーフに使用しなかったかも知れない。本学で留学生活を送ることで韓国の民画を別の視点から見ることができ、それが韓国のアイデンティティだと確信を持つことができた。歴史的に形成されて変わらない民画のイメージと変化していく時代を反映した刻々と変わるトレンドを象徴するイメージを融合することで、伝統と現代、東洋と西洋の調和を表現できると考えるに至った。

最終章の「終わりに」では、研究成果を要約し、自作を通じて伝えるべく本質についてもう一度振り返り、作家としてのアイデンティティと方向性を確立させ、今後の展望を言及する。

## 審査結果の要旨

朴常希さんは「民画の現代的表現 ー多様化する民画と自作についてー」と題する博士論文と《心の波シリーズ》(2016~2017)、《Happiness Trophy》(2016)、《Sweet Utopia I》(2016)、《Summer Vacation》(2016)、《蓮華図ロマンス I》《蓮華図ロマンス II》(2017)、《Santa's Tea Break》(2017)、《Fantasy Island I》(2017)、《Sweet Utopia II》(2018)、《Fantasy Island II》(2018)、《Wonderland: 幸福の国》(2018)の作品を提出して、博士号を取得することになりました。

朴さんは釜山の大学で韓国画を学んだ後に、本学大学院美術研究科に入学し日本画を専攻しました。母国を離れ日本で制作を続けるうちに「何を描くのか、何を表現したいのか」という疑問に直面し、自分自身が絵を描くことについてその根源から見つめ直すこととなります。同

じ東洋美術文化圏に属するとはいえ、教育環境や指導法も異なる地で日本画を学ぶ留学生活は、韓国画と日本画の相違点に気づかされ、日本画を学ぶことの意味、そして韓国画の歴史や自国の文化、ひいては自分自身のアイデンティティーについて考える機会となったようです。

論文内容については、第一章で現在の韓国国内において多様化し発展し続ける民画の定義について研究者諸氏の様々な意見を紹介し、さらに宮中装飾画と民画の関係を説いています。第二章では現代の民画を「再現民画」と「創作民画」分類分けし、具体例を挙げ詳しく述べています。近年の韓国民画画壇の事情は、韓国の作家であっても民画の動向に注視していなければ理解が及ばないことと推測され、これを朴さんが論証した意義は大きいと思われます。第三章では世界を舞台に活躍するイ・イナム氏、ホン・ジョン氏、グック・スヨン氏の三名に焦点を当てています。彼らはいずれも民画を借用して制作活動を続ける作家で、個々の作品の具体的検証を行っています。イ氏の《デジタル八曲屏風》は韓国を代表する朝鮮時代の名画に、デジタル技術を用いて新たな生命の息吹を与えています。絵画の中の蝶や鳥がモニターで作られた屏風の各扇の枠を超えて空間を飛び回るといった動きを加えたデジタルの特性を活かした作品を制作ですが、本作品が単なる物珍しきで終わらないのは、イ氏が借用している《花鳥図》や《群禽図》を過去の歴史上の絵画として扱うのではなく、現代の人々が享受できるよう時代感覚に合わせた作品へと昇華させていることにあります。ホン氏は民画の代表的モチーフを作品に取り入れ、自身が創り上げたストーリーを蛍光色のあでやかな色彩と単純化した線描で表現しています。父親の仕事の関係上、ホン氏はサウジアラビアやマレーシアで育ったことから、例えば《仮題、独身者のアパート part 2-1》では、韓国とともに様々な国を象徴するアイコン的モチーフが組み合わせられています。グック氏は犬を擬人化し、現代社会に向け強いメッセージを放っています。動物を擬人化し表現に取り入れる手法は写真や映画作品にも見られますが、グック氏は民画に現代的なモチーフを加えて、そこに人間と同じように着飾った犬を描くことで、鮮烈な印象を与えると同時に過去と現代の時間軸を作品に内包させることに成功し、新たな民画的世界を創出しています。

最終章となる第四章では「自作の研究」として朴さんご自身の作品を時系列に解説し、自作論を展開しています。

幼少時より韓国の装束（韓服）やその紋様や刺繍に興味のあった朴さんは、作品にプリント布をコラージュすることを試み、生地や岩絵の具、箔の異素材が見事に融和する絵画空間を創り上げます。論文内でも言及されている通り、朴さんが日本の現代美術、そして日本画に興味を持つ直接的契機となった村上隆氏の絵画作品に、「オタク文化」・「伝統的絵画」・「ポップ」の融合を見出していますが、過去と現在、異文化、美術という枠組みを超えるイ・ヴィトンとのコラボレーションを果たした村上氏の横断的活動が彼女の制作に大きな影響を及ぼしたことが理解されます。

博士課程に入学してからは、朴さん御本人にとっての幸福、それを「小確幸（しょうかつこう）」と呼ばれる言葉（小説家の村上春樹氏のエッセイを韓国語に意識した語）を使用して作品の主題とし、日本画材にコラージュを用いた創作を開始しました。宮中装飾画の《十長生図》や《牡丹図》といった吉祥の画題や伝統的な民画に用いられている鶴や亀、靈芝といった吉祥的モチーフとカップケーキやプリンなどのスイーツやベアブリック（シャネルのデザイナーのカール・ラガーフェルドがデザインしたプラスチックの熊のおもちゃ）の形状を組み合わせ、朴さんの小確幸を表現しています。《Sweet Utopia》シリーズや《Fantasy Island》シリーズに描かれているソフトクリームの形状は蓬莱山にも見立てられ、またうねるが如く流れるように描かれる山波の描写は、伝統的な青緑山水図に見られる山肌表現のようです。過去と現代を横断するかのよう画題とモチーフより、朴さんならではのポップさが表現されています。結果として、朴さんが論文内で村上氏の作品について称賛した内容に、実は朴さんご自身もそこに近づき、すでに歩み始めていることを提出作品が示唆しています。

特筆すべき点として、朴さんは自作と第三章で論じた三名の現代美術作家の各作品とを比較

分析していることです。朴さんは「みな民画を借用し、作品制作をしているが、民画の本来の象徴的意味をそのまま再現するより、作家の作品世界を表現するための一つの素材として民画の要素を使っている」と述べていますが、作品で使用する素材や表現手法は大きく異なります。同時代の作家を客観視し、自作との共通点と相違点を論じることは高く評価できます。博士課程在籍時点における民画を巡る韓国の現代美術のアートシーンをヴィヴィッドに捉え本論で論述したことは、これから先、それぞれの作家の作品がたとえ大きな変貌を遂げても、記録のひとつとしての有意性が認められるはずです。

朴さんの絵画に民画の借用は不可欠な要素となっています。博士論文の軸も民画が成立した歴史的経緯の検証と今現在における民画の状況を論述しておられますが、しかしながら日本人にとって民画のイメージは柳宗悦によって形成されたといっても過言ではなく、朝鮮時代の民画を思い起こす人が未だ多いように思います。だからこそ、今日の韓国において民画がこのように多様化し、民画の影響を受けて制作に取り入れている作家の詳細を述べ、同じく影響を受け作品に取り入れている朴さんが客観的に自作を論述することは重要です。けれども、惜しむらくは、朴さんが博士論文の主題を民画に据えたため、自作論においても「民画の借用」を論旨の中心に展開していますが、実のところ朴さんの作品の特徴は他にもいろいろとあり、例えば、プリント柄の生地や箔を駆使してのコラージュ、その異素材と岩絵具が作り出す質感、そして朴さん独特の深みのある強い色彩は強い個性となっています。むしろコラージュと色彩こそが、本稿でも取り上げている同時代の作家三氏と大きく異なる点です。民画の借用だけではなく、コラージュがもたらす独特の質感と色彩も朴さんの作品の利点であることを自覚し、制作に活かしていただきたいと思います。

年齢や環境と共に朴さんの絵画の主題も小確幸やユートピアから変化していくでしょうが、民画のモチーフをどのように借用するのかも今後の課題になるでしょう。日本での制作活動と博士論文の執筆活動が、これからの朴さんの作家活動の礎となることを確信しています。

(木下 京子)